



R18

期待に
こたえて
欲しいだけ

こくりとアゼムの喉が鳴る。

そのタイミングでアゼムの快楽を引き出そうとするエメトセルクの指が、ナカの敏感なところをやわやわと押し解し、濡れた髪は悦んで指に絡みつく。

「や、いまは、だめっ……!」

きゅう、と啜えこんだ指を締め付けておきながら、アゼムは吸い込んだ息をはふ、と吐き出した。それは快楽に満たされている時とは違う、どうにか熱を吐き出して欲を宥めようとする意図があったので、エメトセルクはどうせ逃がせていない熱を煽るように耳朶に息がかかる距離で言い募る。

「そもそも、誰のせいだ、こうなったのは」

締め付けられた長い指をゆっくりと引き抜き、エメトセルクは充分に張り詰めた自身の欲を、アゼムにグイ、と押し付けた。

はつきりと感じた熱に、またアゼムの喉が鳴ってしまふ。

「お前、私が何も感じずにお前に触れているとも思っているのか」

「おもって、ないけど、でも、だって、ヒュト口ダエウスが」

「まだ来ない」

「でも」

「いやなのか」

ぐ、とアゼムが口ごもる。

固く閉じた唇とは裏腹に、エメトセルクの欲をはっきりと感じた入口の方は受け入れたがってひくひくと蠢き、アゼムが身を振るとぬるりとなない舌で舌なめずりでもしているみたいにこすれて、はしたなく、ゆるく、ひらく。

乱れてたくし上げられたローブの布のせいで見えていなくても、どうなっているのかなんでアゼムにだってわかってる。

「あ……っ、ん……」

「ほら、ハッキリしないと、入ってしまうだろう？ お前が答えるより先に喰いついてきそうだが」

「……っ、だから……っ」

まだ来ない、と言われたって、確かにアゼムはヒュトロダエウスとも約束した。エメトセルクが何を根拠に、いつまでのことを指してまだ、と言っているのかわからない。

もうすっかり指で解されてしまったから、押し付けられて感じた熱と質量で貫いて、そのまま満たしてほしい。それはきつと、お互いにとっても気持ちがいい。離れていた分、ゆっくりに感じて、分かち合いたい。だから時間を気にして欲をぶつけておしまいにしよう

な仕方は、今はしたくない。

それなのに、触れてしまった。触れられて、身を預けてしまった。

このくらいなら。

もう少しだけ。

嫌なはずがない。でも、まだ残っている理性は友人の来訪を気にしてしまう。

長く言葉を紡ごうとすれば喘いでしまうから言えずに、どうにか察してもらおうとして耐えているのに、不意に腰が揺れて催促するような動きをしまい、結局喘ぐような声が出てしまった。

「だから？」

察しなくもいいことまで察してくれるはずの相手なのに。

察するどころかぐりぐりと、わざと太ももの付け根辺りに逸らして押し付けられたまま腰を掴んで揺さぶられたアゼムは、自分では揺らすことのできなくなった腰をひくひくと震わせた。自由に動いていたのなら、きつと本当に自分から喰いついてしまいそうなほど、押し付けられている腰は勝手に浮きそうになって、震える。

ほんの少しずれていたら、それは肌ではなくて、ナカ入り込んで、一番奥に与えられるはずの愛撫だ。身体だけではなく、自分を成すエーテルそのものが深くまでじっくり愛されてしまうような。

欲しくてたまらない、と身体が訴えて、物欲しげに締めつけた何も無い下腹が強く痙攣する。

いやだったら、アゼムはそもそもここまで許しはしない。自覚していて、どうにもならないから馬鹿みたいに相手に期待しているのだ。

「いっぱい、ほしくなっちゃうでしょ……!」

「私は、いやなのか、と質問したんだが」

「いやだったら、こんなにほしくなんて、ならない、と、——ああ、んっ」

続きは短い喘ぎになって、アゼムの身体が跳ねる。ただ願望を晒しただけの答えに羞恥を感じるよりも、どうしてわかってくれないのと駄々をこねる甘えを見せたアゼムの様子は、エメトセルクを満足させ、口角を上げさせた。

「ねえ、エメトセルク」

潤んだ声が、だからお願い、と紛らわしい願いを告げる。

アゼムは、熱で溶け落ちそうな理性で期待している。やめてほしかったなら迂闊なこと

をするな、と嗜められることを。

けれど、それ意外の全部で期待している。

「あ」

ぶわり、とアゼムの肌が粟立った。

「はい、っちゃう……」

押し当てられただけで、どういう風に受け入れたらいいのかわかってしまうほど、アゼムの身体はエメトセルクを覚えていた。ふっくりと腫れた花弁を押し分けて、明確に先端を宛がわれた場所は、もうふにやりと蕩けて相手を飲み込み始めているのに、全然足りないからアゼムはそんなことを言った。

溜まり過ぎた粘液が、ぶちゅりと押し出されていく感覚に、まだ受け止めてもいないものが溢れたように錯覚して爪先まで痺れる。

「そっだな」

「……ふ……あ……ああん、あ……ああ……」

太いところが入り口を通り、ずりりともぐりこんだ先端は最初の気持ちのいいあたりまで届いていたのに、アゼムの身体はエメトセルクの欲を締めつけも、締め出しもせずにかいまま受け入れている。

唇だけが大きくなわなないで、また繰り返す。

「だめ……ナカ、はいっちゃう……」

「このままだと、奥まで全部入ってしまうぞ」

指よりも明らかに質量のあるものに押し広げられているのに、アゼムは腰を引こうともしない。エメトセルクも、もう入っているだろう、と指摘はしなかった。

くつくつと、笑う音にアゼムは期待している。理性はもう溶けてしまった。

もう一人の客人は来ないといって事をすすめた、エメトセルクの言葉を信じるときめてしまったから。

浅くなった呼吸に合わせてひくひくと腹が動く。

その様子を、エメトセルクは目を眇めて眺める。

ひたりと吸い付いたナカは、それ以上強く絡んでは来ない。正直に、そして健気に脱力して、待っている。最奥まで届いて、満たされるのを。

「いいのか？ アゼム」

「ん、あ……っ、あ、……だめ……!」

「お前こんなにしておいて、まだそんなことを？ ……くっ」

笑っていたエメトセルクの声が、詰まる。

アゼムのナカが焦れて、うねった内壁がまだ浅い場所を押し広げただけのエメトセルクをずるりと飲み込む動きをしたからだ。

「エメトセルク、だめ、わたし……っ」

とろけた目尻のふちに、じんわりと涙がたまる。

涙に溶けたアゼムの期待を正しく理解して、エメトセルクはその身体を支えて少しだけ待ってやる。アゼムの身体が何を期待しているのか、本人よりもエメトセルクのほうがよくわかってしまうくらい、いつだって味わうように隅々まで観察しているのだから、当然と言えば当然の仕草だった。

その期待が正しく彼女の思考と言葉になるまで、じつくりと炙り出すのは、いつもまたされてばかりの彼にしてみれば多少の意趣返しなのかもしれない。

「……もう、……がまん、できない……」

だから、彼女自身が認めたのなら、これ以上の問答は不要で、後はその期待に応えてやればいいだけのこと。

「しなくていい」

エメトセルクが短く一言伝えれば、アゼムは素直に頷き、目尻のふちに何とかとどまっていた涙は紅潮した頬を滑り落ちていった。

「ん……きもちいい」

うっとりとした唇がふにやりと笑う。気の抜けた、緊張感のない柔らかさで。それから、ゆっくりと吸い込んだ息を長く吐くと、息の末に微かな甘く啼く音が混じった。

支えられた安堵に脱力した身体をそのまま強直に貫かれていく痛みは少しもなくて、すっかり当たり前前に馴染む形をゆっくりと締め付け始めてからようやく、じんわりと奥に広がり始めた快楽を脳が拾う。それから甘えた啼き声があ、あ、とちいさく息と一緒に喘ぎになり始めるくらいには、ただ最初の期待を満たされた気持よさにアゼムの頭はふわふわとしてしまっていた。

「そこ、……おく、……きもちいい……いっぱい、なってるの……すしく、いい……」

アゼムの手は半ば無意識のうちに自分の手でなぞったエメトセルクのローブをエーテルに還し、素肌をまさぐる。それなのに自分のローブのことは忘れてるので、アゼムの手が滑るとそのローブの袖もエメトセルクの肌を滑る。

エメトセルクは汗ばんだアゼムの首筋に唇を寄せながら、だいたい二人分の着衣をふわりとエーテルに還した。

こうなっている時にアゼムが自分の服のことをすぐに意識の外にわすれがちなのは、アゼムが自分を感じることで満たされている時はそのまま溺れさせておきたいというエメト

セルクのせいでもある。

だからローブが消えてもアゼムは驚かないし、むしろ肌をよりひたりと密着させてくるだけだ。

はふ、と吐き出された息は欲に色付いて、しつとりと熱を帯びていた。

深く腰を擦り合わせる動きに、ぬち、ぬち、と僅かな隙間から濡れた音がする。

すぐにでも達してしまいそうなくらいの緊張感からそうされてしまうと、今度は達するまでにいつもよりずっとずっと深い快楽を期待して、満たされるまでねだることになるということをすっかり忘れて、アゼムは悦んだ。

「ああ、奥も吸い付いて、締め付けてくる」

「エメトセルクも、きもち、いい？ ……あ」

「……また締まったな？」

「ねえ、……きもちいい？ おしえて」

きゅう、と音がしているんじゃないのかと錯覚するほど、アゼムは自分のナカに納まったエメトセルクの熱を舐め、欲の形をしっかりと締め付けた。快感が駆けあがる感覚に背中がぴりぴりする。

「気持ちいい、が、……私は、まだ足りない。お前もそうだろう、アゼム」

「あ、んあ……うん、もつと、……ひう、あ、あああっ！」

ずるりと中途半端に引き抜かれて物足りなくなつたアゼムは、腰を揺らしてもつと、とねだる。今度は勢いをつけて幾度も最奥を突く動きに、アゼムの嬌声が一段と高くなつた。締め付けられていてもよく濡れていたから、その動きはスムーズだったけれども、肌を打つ音と奥を突かれる衝撃で勢い以上の激しさをアゼムに与えていた。勘違いした脳は勝手にアゼムの胎を潤してぐずぐずにとろけさせ、粘液はぐちゅぐちゅと音をたてて掻き出されて、どろりと滴っていく。それでもなお、動きも、音も、激しくなる一方だ。

彼女の期待を全て掬い上げて応えてしまう相手に本当に溺れる程満たされるまで——
気持よさに止められなくなつた涙も声も枯れるまでねだり続けてようやく、欲しいだけ満たされた彼女は、やたら目覚めのいい短い転寝の後に自分よりすっきりした顔の相手に、スッキリしただろうなどと当然のように言われ、無自覚なエーテル欠乏だったと教えられた。つまりはもう一人の約束の相手である悪友は当然そんなことは知っていたから来ないのだと暗に伝えられたのである。

わかつていて、アゼムの誘いに対して「いつも通りの頃合いに行くよ」と答えたヒュト口ダエウスと、そう答えただろうことを知っていて種明かしをしないまま「来ない」と判断してアゼムを煽つたエメトセルクの暗黙の了解という奴にアゼムが仕返しをするのは、次の

旅の後のことになるだろう。

みゆきしえんしえー
おたんじょうび
おめでとうございます



はやかえ@眼鏡セルクRTbotより
2023.07.30